

NP22573

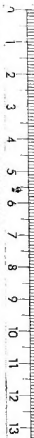
門
冊
分類架
著
備考

(横文字研究部)

A 00

清竹

591



酒百首

曉月坊

鵲の枝

家の集

豐藏知信海

半井上養

のむ酒乃うあみはさうあひを
 花め碎あうあをうたうん
 高折乃あーの大竹前うあ
 のうひそみうあああ
 月乃船あううあああああ
 尾あうあああああああ

讃

山崎

宗鑑

像



けん山崎 長崎新子深江一と五生
舟を伐り健名を傳へし市子ひきき
新水おれ他と新しれり今流渚入
認めり常しと来ま流へてふと
おれおれとまふふい

とやういおれ道なてゝおる油角
すれとまりと此人多る志也

椎本清徳

春

春の風は知らぬハート

池田舟員柳

見渡せしれとる系も二月より年の内はき元日乃そ

雨のころの元日はあけ人のりき酒を

たうぬそ

遊川寺接雲

年娘と祝ひの酒をさうのころきおまきこふかく

こーの娘よ

雲雲

春宵はさうさ金の陽うありおははりき今夜の初を

酒香を元信

祝ひおさうかぶらもお家神まゐの酒をいん

ぬるのちうろの能て

ね雲

情法と捨てたうやかうの法をひゆくへ眉を方うよ

龍の細る

全

路波とたつる龍の身たちて古跡のそにゆううろ

佛の利き

廣観

お擇迦てもまやんをひのお方われへまう様は孫をうろ

二月の末ふねもろへ川はまそ

あて送うて

のび而れまのわや楊のう目をおもひふ條りうね

東橋とんて

走帆

やうくや風小眠まうまをたれぬのやうく空絲海棠

やうくをたれぬまをたれぬまをたれぬまをたれぬ

小竹間うのわうて

梅雲

蓋よさそふ所のふさううろやうれなりやまて

うれまてをたれぬ

全

花のれふゆあひ中とつきぬやう方けう入雲の漬

こころをたれぬまをたれぬ

元信

花とこれひこを鼓め目とまうわきうふ典のむう下れ

花のうろあひこをたれぬ

全

なかくとてんて花もまうな花のまをたれぬ

全

君のうへに

故曰

喉の枝め絡り 短冊いちらん後の雲々けうね

三月三日あづ人の節を大酒にて

揔雪

碎^ありてこぼるゝとゆ^いふ子^ごの意

二月三日

走帆

解をうのひ面をうのひ川をうのひのうのひ

三月王生に詣り桶谷の和云とある

○

見^{けん}物^{ぶつ}もどろろにやうきまうひつててみぬのう様^{よう}こや

2000

肉親

嫁とす^{こらび}や^い垣^い味^いな^いは^いは^いて^いも^い苦^いい^い姑^い

蛙

同子乃結成^{そり}と云^いふ^ふ病^{やま}く^くせ^せる^るべ^べれ

哲人の名を時計賣と爲風と植

李長蘅

撐雲

こけの草や同、塙根^{ヌサネ}より系^{ケイ}のて移^{うつ}れまゝのてまゝなる

二月盡

喜之氣陽の太鼓勢一里の夜、夜ようそ歌子

夏

貧家の更衣

清歌

宛われ衣久し中佛とぬきてきつたの間は袷あきより

卯酉

走帆

ま一面より卯酉とされ舟とてうき伝はの衣ゆき袷あきを

卯月の夜をまてく人語

元信

飯のなれまをを饒にぎはの浦内うらうちはむちうたるとやむ人々

いくまを

潮流

蓮れん葉はの傷やうふ物もののうびるも常とこ店てんの衣ころもう病やまとて

蓮池は池邊

元信

刃やいばで清きよまてうけ蓮れん葉はをひくられなまうのふ

小き蓮は蓮と極く花と侍に似

鳴りう

萬葉歌集

くわをく思おもひ垂たりう鳴なるもや蓮れんの衣ころものすむ

あう人の侍とて病やまをうぬて鳴る

夜間もとすてわがうらうとそりつひの

りのくたちさいまきう何とてふ足ふ

にあう一青侍とてうきうとやうと

梅雲

時ときを市いちの銀ぎんきと我われとすかきうけうは清きよの衣ころも

これ月のは形むふよをうたて

もて

淀川へゑれてたゞと紺むし紐といふはむいさめうた

五月の沖抜り

梅雲

まゐりやナヤナキ地紙の神くも摩訶般若をたれと

秋

七夕

法橋良安

今宵逢と皆うげとといふれはさそれぞと無とあり

初魔とまろりの天はまゝ天の川おけろろと天乃運萩ハ

文月七日の長長町の表と通りいふふりて

元信

萩貫ひとやうく今宵のよ向や縁を垣ふり人のを

南のむ里の踊とんより一と萩くや

老女のまゝ一とまゝ

老興

秋へまゝ夕陽をむかふ萩萩のうへさうとわやのせい

寄儒者竹影

稻嶺

旧ふ新日と又新め咲花の朔寝人といふれゆきゆき

女郎茶女

ともしれぬ今人まてうさなふ所の遍照といふ

名あるこの月を月とてそのこと

まひほのほえとういふこと

走脱

死なぬ所の居る月を月とてそのこと

同じく草と花をうてそのこと

かゝりひうて

将軍

月やいりつやとてそのこと

月

故言

月を月とてそのこと

月を月とてそのこと

とて

わその秋はもうとてそのこと

今一着とのふりて

月とてそのこと

月を月とてそのこと

潮流

市中とてそのこと

あふの月とてそのこと

元信

月とてそのこと

満ち

満ち

浪人としてそのこと

月

秋場新裁胸

備前よりやのやん遊くは廣しに來うううの戸

成親

いづい思ふくはま枝あちちと花はれももな居

九月九日

全

馬せ綿てわてまうわう葉の風香て給ひものや昔月

九月十二夜お舟の浦ま

持名

桂ものこりもさわわれ海飯又十三夜月もあ月新

西の九月十二夜市しるな大おひし

一燈三日月心く月入くうなれハ

異雲

夕アとび今宵ありて月もれかき延あ今あせハ

月

全雨杉魚坂

降のうりそとやあに海うあ田どの月ろこにやれ里

ち雄の楓をうまうて

元信

松月とくひてうまうさる銀の根を成光のつさのな葉

牛滝山のともち

意卿

あのを葉をぬいなるや成光をぬいひまひなう

紅葉

成親

雲の希きぬくふれをきれはる清備とうあひりて

坂本のうまうさる葉をさる

湖松

ゆかり葉をさるてこをさるの時佐とみづひ日た満ふや

田茂川郷のき折る萩園
師哥と思ふ如く

成親

煉の田より多にハ爺おやハ嬢おやうより子供こどもハふはるるより

秋の来あちこちと道悉くそ

临江

青の魚より金と割つてきつて秋の味にあらざる

冬

秋分月

良寓

本之誠意を以て之を成すなり

に切の出来ふゆりやうに時ぬい、うやれ

攄雲

風きり一時雨小桑葉光輝りてふふあまふ希乾ぬき事（全）

玄機解

潮松

親よりほろろお玄のよ倅入りの瘡う患あにな

坂田甚の風はふきと雲はく

走航

名木の坂田等の樹々をいへん亭盛乃一備(亭木)

夜ふの哥

袁川叔清

鄙乃都愛に車の音も秋の牛みみりく下り系

雪

良友

けいふふんりのかうふれきうきふのうふふふふ

日

成親

けさの夜ぐも奇野^{きや}やあこれの夜ぐもいふれあぐの目名

雲の夜は雲うぐのひき飛ををそ

元保

ひき飛を飛^といふも西^{せい}白^{はく}一^{いつ}飛^とうぐの物名をそ

雲いふ飛う日下寺町とあうて

持妻

降^ふるのさむいぐのく降^ふのさむ酒^{さけ}のたそを人ぐ

水景

成親

かさあれはの實をなぐといふあれは刀をぬきぬきぬき

と川分

和田良介

こゝにゆき月^{つき}あけやふ刀^やをぬきぬきぬきぬきぬきぬき

摘碎

てのちまきひくを寝^ねとせぬクアをぐ巨^ことあまの海^{うみ}物名

持妻

あやらのまぐりかぐりかぐりかぐりかぐりかぐりかぐりかぐり

良安

救^{きう}務^むかまといひゆりかぐりかぐりかぐりかぐりかぐりかぐり

元信

世の中^{よのな}のうきとまきだ^だ国^{くに}のみくともゆきまきまきまき

一二女

人あめとひ月^{つき}日はひれそをぐにわを死^し入^い目^めのく

神紙

大乙き令
少ふき令

可親

大乙き令
少ふき令
あつ神主の月へあつてもう何れ

あつ神主の月へあつてもう何れ

す碑は及人はいらうとあつてもう

あつてもう

檜雲

神主の月へあつてもう何れ

泉州大乙き令

阿市

大乙き令
あつてもう

賀

良安

君代の月へあつてもう何れ

あつてもう

成親

末代の月へあつてもう何れ

あつてもう

平金成賀

寺田正勝

清原あつてもう九十六歳

またやうな川の百も波のつゝもりてなれ

潮水のときぞ かく傍のうゝれふや

神もやうはるもの松とくみと思ひぞ

さふまゝといひぬゆれもふゆの命をけんであぬや

か賀岡大寺の城とてうゝんあつた

ふさと腹あててこいゆゑをぬき

すゝまふふれりうゝいふ世の

初ふとまひぬゆれのつれぬ人あつた樹のそり

とぬにふふの清くはれこいふの

物とてなれりあつたのこれみ樹のそりぬつと

とつてつた我とて酒の代り

とつてつた我とて酒の代り

物とてなれりあつたのこれみ樹のそり

福井の城とてつたのこれみ樹のそり

物とてなれりあつたのこれみ樹のそり

雲の聲なりあつたのこれみ樹のそり

あま附温泉とてつたのこれみ樹のそり

さういふ常りあつたのこれみ樹のそり

風とて古里の事とてつたのこれみ樹のそり

夜とてつたのこれみ樹のそり

先具

全

全

全

立

待立

良安

待望は、まちのぞ 我々多數の心ゆく行くかゝるのみぞとて
まゝくひくひと待つ事なれども、いかに かくてあはれなる

恩

接實

なまのうぶ髪はほりてちくちくあめそくのきつむき

初逢意

全

新枕今夜いちはのおもしろく十八の頃よりや寝えん

寄徐氏均鑒

走帆

いふまでもなく、^{おもしろく}学問の道は、^{うそ}めづるべし。

儒者乃子思の意

按

親^{オヤト}にのちろかぢんやゑ^エのけ^ケとれてせうじいひつゝ

寄時文忠

徳城のうと身と付く夕時を極とぬきいふうとぬき

寄念佛庭

胡流

以^{あや}着^え中^{ちゆう}を^を看^{かん}つ^つま^まり^りと^と輕^{かろ}飲^{おほ}此^こ切^き渾^{こん}ち^ちん^んと^と書^かけ^け

壽儒名在

我拙

あはれとふくむをまゐるのとき

寄垣黃立

我胸

思ふ事あるを何と小豆のやうにと赤穂うゝれ

寄妓

足雲

秋意をわひしやうに品なうつわをふりてん

仙谷

新讀の赤いあうふなれはまゐりなふりいふく

寄下女

湖松

金のまゐりふりあふりかたきと煙のふりあう

寄酒

樽臺

ひんてふりあういふりあうふりあうふりあう

寄并戸

寺田正晴

ついに并戸の純いふりあうふりあうふりあう

寄筆

我胸

思ふもふりあうふりあうふりあうふりあう

寄ら

故自

ふりあうふりあうふりあうふりあう

今

やれふりあうふりあうふりあうふりあう

寄漢地

今

あひあうふりあうふりあうふりあう

威親

漢地のふりあうふりあうふりあうふりあう

寄梓玄

故首

やふふとわいひてまねくふねわつまねとて恨うを

寄の美盤玄

持臺

神々々思ふや美人のまろくまねう二天今

しい儼とまねく美人の見二ひきく恨病れ

寄基玄

素卿

危やうとまねく美人のまろくまねう二天今

寄の美盤玄

故首

美盤のいけり美盤のまろくまねう二天今

鮮玉

金銀とていへ角も玉とのなる桂馬の歩兵なり

交房

王との角や美盤のまろくまねう二天今

寄紙子玄

愚笑

けいこつりつ身も美盤のまろくまねう二天今

寄紙子玄

鮮玉

いふあて美盤のまろくまねう二天今

寄火吹竹玄

故首

竹まねく美盤のまろくまねう二天今

寄栗研玄

傾碎

あまのうらやまをうけて背をたたくとて泣くが

あまのうらやまをうけて背をたたくとて泣くが

あまのうらやまをうけて背をたたくとて泣くが

玉音より書簡をもつてわけて我身とていふ他を合も

寄火澤玄

赤松

細くてもうきれあわてふまの顔とめくも

寄火澤玄

成親

あまのうらやまをうけて背をたたくとて泣くが

あまのうらやまをうけて背をたたくとて泣くが

あまのうらやまをうけて背をたたくとて泣くが

赤松

あまのうらやまをうけて背をたたくとて泣くが

あまのうらやまをうけて背をたたくとて泣くが

赤松

あまのうらやまをうけて背をたたくとて泣くが

あまのうらやまをうけて背をたたくとて泣くが

赤松

あまのうらやまをうけて背をたたくとて泣くが

あまのうらやまをうけて背をたたくとて泣くが

赤松

あまのうらやまをうけて背をたたくとて泣くが

あまのうらやまをうけて背をたたくとて泣くが

赤松

あまのうらやまをうけて背をたたくとて泣くが

あまのうらやまをうけて背をたたくとて泣くが

赤松

こは海をくぐりてうらりーとあつて
とまると日のと入日とをわたりて

かんちりー

椿雲

身ありとすもこのや二より此音ハ二條線も二より人

このあつたといひてさきよりそこの

さきかこことまひー

椿雲

三のりやききーあてあつたふのふとあつてはさき

雲のみのこつてうれや

身れぬハ神よりあつて他このあつた折とゆつて

寄葉玄

交清

うらほそこのりあつて二條線も二よりあつて

寄理火玄

全

頂上火津のあつてうらつてあつてあつて

新町

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

我浩

道形

全

うらつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

妻脱をさしてうらつてあつてあつてあつて

至と送つてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

面と見えいものゝやれぬ身うのひけをばし

人

吉水

玉章やかゝる人もやれぬ現の海のうきもの

雜

太坂を津那波作紙とて人の製る

超俗の紙とて人の製る

貞和

けら又雪とされいやわものひさひさの雪は花を
雪のうきものまなくともまのめくひく象内

えくまんとて人の製る

とて人の製る

走航

稀めぬてよりふ風は終とて天の川やわやう

あま

とて

老うをわきまぬてよりふ風は終とて天の川やわやう

竹は産おは馬の後よりあふ

良安

身よりききものこころとねう校う石の鳴りうき
世の中は君臣の道蟻のうきあ産と忠くこねく

誦太王経

湖松

繪ふるもろや天皇の人よりうきうきいひいひ
大は後の執事の給とて

政隆

ゆきうきやうきうきうきうきうきうきうきうき
うきうきうきうきうきうきうきうきうきうき

同十三佛 沈徳田

冬舎

あまうん十三仏と現よりうきうきうきうき
うきうきうきうきうきうきうきうきうき

同鬼を令佛

大石

松雲と地獄と世よりうきうきうきうき
うきうきうきうきうきうきうきうきうき

文政里の後の西條

冬舎

仲顔と毛虎とうきうきうきうきうきうき
うきうきうきうきうきうきうきうきうき

題下れ虎と象の陰拂

冬舎

座よりうきうきうきうきうきうきうき
うきうきうきうきうきうきうきうきうき

大まといひ

故白

傳入のうきうきうきうきうきうき
うきうきうきうきうきうきうきうき

日光の迷懐

山陰の秋よりうきうきうきうき
うきうきうきうきうきうきうきうき

蠟燭

秋胸

らうとの塩坪うろちをこそ今に入まて上臈とや

著

寒

つをさき野うううめう着いさあの上の掌内ちうれ

煙
紅
鳥

友房

より愛の二口三口の戸を燦まるとして金さち

然乃見也

2

月の輪を思ふはうに指縁をききと膝をたれ

恒吉(ゆき)より小原の妻より

とろろあんといふところ

元信

家名を以て尊ぶと云ふ所のを以て人々まで酒の糟の害

大融寺の邊りの唯心亭を

全

たいゆじ千のねいそくやゆいんせいのてんぐし

佐々下向の海峡より

臭坂

耕^との榮^{さか}えとめさ小所^こ隊^{たい}ささ水^{みづ}のちんたるふ

清の浮浪の亭子

无信

佛戒の飲酒戒と云ふれども此貝蓋て沙汰うむ能

清水屋のあやうといふ人の宅まで

古人

命とせんとするや清^いみやのそとにてあもつとて失^なれ

新町平地やきーるまで

齒松

さのやまより客よとけいものひら／＼

あゝのまゝあり

故自

帝あゝのまゝとて人よきなり人棹とてまゝのまゝ

人のまゝとて酒のめいさう

全

おまゝ人まゝとてまゝのまゝとてまゝのまゝとて

あゝのまゝとて人まゝとてまゝとて

りこ

まゝとてまゝとてまゝとてまゝとてまゝとて

庚申堂まゝのまゝのまゝのまゝのまゝ

なりと人のまゝありありあり

我胸

噂あゝのまゝとてまゝとてまゝとてまゝとて

まゝとてまゝとてまゝとてまゝとて

まゝとてまゝとて

全

名酒とてまゝとてまゝとてまゝとて

あゝのまゝとてまゝとてまゝとて

あゝのまゝとてまゝとてまゝとて

あゝのまゝとてまゝとてまゝとて

全

あゝのまゝとてまゝとてまゝとて

あゝのまゝとてまゝとてまゝとて

あゝのまゝとて

あ松

あゝのまゝとてまゝとてまゝとて

あゝのまゝとて

良安

全

系たんとて流るまゝ一ひれはき面のまゝかたなく依
ねより道在様とていひて

陳露

因縁おれりてゆれを縁邊のうへおのやてあてうひ

中を顧みく人のこゝろ

故自

君と我ゆたより川をわたりて思ひあふ事とわくや

あつ人の心よりまゆ一拂をあらて

持零

世会は男めされて殺すのふりてどうくつくく

あつ世捨人の心よりまゆ一ふたのふり

一を心の風柱よりまゆ一能ぬ人ふれ

くみくまのふたのひんまつ

今

あつあつおれりてのまゝいふまゝにのたのみあて

人いふの答を尋てあつあつにあり

まゝはあつあつにむねのむねをあらわし

あつあつにむねのむねをあらわし

あつあつにむねのむねをあらわし

今

あつあつにむねのむねをあらわし

あつあつにむねのむねをあらわし

あつあつにむねのむねをあらわし

あつ

あつあつにむねのむねをあらわし

あつあつにむねのむねをあらわし

今

2000

我拙

高貴と云ふものの糸巾もてせ病とやういふやう
若男ともいふゑん人のね滅のまゝ

哲一と云ふ

全

刀をふれ小幡の如^{ごと}く織^{オリ}袖^{そで}ふとぬきまはひのそらほに
朋友のこゝ留守^{しゅ}刀を斬^き又焼^や乾^{かん}哉

朋友のこゝ留守と云ふは焼鈍哉
傍々として

全

最^もに^きん^ぎを^とり^てや^さな^く進^みを^して^いか^うに^いふ^心を^しめ^る
 万人^の老^母の^心を^しめ^る

わろ人老母の爲人さうさうの
と送るよとて

良安

かみききの新宅といふからせ同様にし江家のA

平家朝臣大板

せうと市二楊ち矢うとていせうと

壽松

うふふいびきる矢敷のちをていやくむまの全席り

駄ちんちんのて

碎炭

はうちうちとちんくと日守をのめ
儒と業くまう人の教は盗人の入る

松橋子の松と云うてあると、いづて

思ふと盗の魯論の道ふのひそしの巻れどもむろ
儒者の婦の産ふのそとつうと

儒者の婢の産まのそとをうけと

何方小庵あり老匠と括き世れも

眼病と患ふるゝと爲るにふたれ

詩めいそせふさうの都^{ええ}座^えよりこれ醫^い療^{りょう}眼^{がん}病^{びょう}を治^ちす

夕兵乃垣根よりうきうき女を助る

之海接之

磨^ルぎ^ぎく^く 差^サく^く あ^あく^く も^も の^の 捨^スく^く 顔^カん^ん ち^ちう^う

是痛多引毫毛者比

之

いふお世のまを極まるゆゑひびくふとふをねゆえ

寺人爲國和み包てゐる

和尚 今かくて此道^{まじ}而^そ我^{われ}ふゆづりなまは

久く眼病と云ふて

秋陽

眼病の身へさるゝやうに種も日毎一日やとせぬを案

世傳玄感の二月夜寝覺く怪夢を

橘丸

人多し和まじく人志あらず六つを病めむと婦人

錯炮の迷候

統計

あさねがひとのこころのみ。かんもさへなほよめた文

人の心は若くは老くとも

魚飯

せんがのあつたてと、い風に入らなうとて、う登りまゐらう

題詞

隨飲

と云ふを腰^{こし}へさすなり。ぬきを痛^{いた}くせん。雙^{ふた}ふた

たかふと喰てうりきとくふ

胡松

たち考へてゐるものだから、何とやら、ゆゑであらう

家内はさういふふうで

蘇芳と名ちて胸あはれなり

接零

留守事またのひのへ酒さうきん。あそとにきぬ。

高きとの衆と相争ふを欲し

いさよのちよ

歆

いくまをきぬ歌のたのみふ代をきけはなありき

一

國をなまなくきこ所より新所までたの言に終る

翠雲

雨の日の友のりゝきてかき解きあはれい

故自

くさくさく寂るゝとて眼目とすゝぬ夢を夢中

北畠天満文(とまり)

水菜庵よりあつて五丁とて、八丁人寺の北にありて又市岡なる所あり

丹波より大市と云ふ所ありと

三子

[illegible]

死んで

とんず事いひつらぬとて、
てんてんてんてんてんてん

成親

鎖と鋼條よりなる

全

憂の救百八ふりてあそむるそふき方鬼に金銀のみをいへ

後されひの太病を腹とて

眞珠

佛顔

さうとすやいづのいづ鬼のそをていそふ

高勢より候り時ちとてさう候

て候とていづて

はは

郭公郭のそのもつれと先難ははとてやとの衆

そふのそふとて

我若

非とちとていづてふと池とてのそふれ娘とていづて

茶臼とていづて

全

茶臼とていづて建康ゆつて池の海世とていづて

哀傷

良安

うく間とていづていづて海殺のむとていづて仲のそふれ

海とていづて人の一因とていづて

ていづて

湖松

人とていづていづて海殺とていづていづていづていづて

衆人の海殺死とていづて

良安

世に於ていづていづて死なふとていづていづていづて

異常

良安

義用とていづていづていづていづていづていづて

釋教

追尋のまねとんて

潮松

折るてふいはいまあきてなうつ刀よ追尋はれそまう

まわろ人の詳月の追尋より尾

尾を纏回して

全

わやまろ詳月の追尋とて護念經といふめを

門列也後村並服寺国姓よりまろ

乃人々へもまろれ

唐親

国姓いまま中務並服寺よりあうめをぬつて

濃俣

三

方便は井原を交て説經をよめ彦陽てうまき

東洋門跡後の九月三日ふ夜雨の

鳥坂

国月は日とも雲の雨に向へるあうまきと云はれ

神を月のは少東の寂光座と云ふと

そあはれけりとも後白河院の清

と云い

小見

まろあまのあうけの池のあはれあいのうれあう

あはれあまあまあう

習耕

枯し石のあうともあうまきと云はれ

被恩座よりあはれだにわの

五雲

今更の執事達といひてち余を其の道とて

淨照坊といふやうな事をして候ふ所哉

好りて

負折

おる場へ入松遊ふ程のやうなれと云ふ天下に我獨服

齊釋教を云ふ

良安

吾人乃 中ふ女へい 久うく

石家流

ひきの粉 五株三十の

代造と

皆家おれ

誓ひて 人間の

蛇虫や

うづる

あうりく ともひま

ゆかれい

網路松と

島村初見

反奇

南をくすきで南なりといひて是なるお梅なりのみ

近か

系空

己のあふ顔の中は浮世の夢をなうとてなり

小童師 迎山

寄度秋夜

泉光

まほやふねあも同く我をいふあなは其神なりと云

野白人

膳量

白人の肌を雪れたものといひて毎又た力ありと云

八瀬電内呂の吟

千前

阿房去雲 其處よりそかしの山に元々て阿房のつらなるは
なくしつと 谷川の里あせうくおとつと極よめあまのふく
いと和けの 流あまふまとい酒とを和くを食ふれぬ赤松の
赤雲よりま 赤雲の赤よりまふよりあくと赤雲より赤なるはれ
まふつと ねむとぬねむの初めくまやせきううふふふて
ひさう後成 初めくとお機りううふふふてひさう後成谷内呂の
ちげけの 赤雲のふけはぬふけりうう後成ひさう後成の奥に
ホイそ後 赤雲のふけはぬふけりうう後成ひさう後成の奥に

又丹後

赤雲ふけりううはさくとかつた丹後かすて丹後

くまろと

電内呂の赤ひは赤雲月をその赤雲赤ひはさく

阿房丹後

くまろふれぬ赤雲も初らん阿房丹後浦のま

東近江

日うりふふふの八雲さくまふて本を日し

川畑修子

いふて赤雲かふれぬさく川畑いふて人のふれん

赤雲

赤雲さくまふれぬさく川畑いふて人のふれん

赤雲

赤雲さくまふれぬさく川畑いふて人のふれん

赤雲

赤雲さくまふれぬさく川畑いふて人のふれん

赤雲

赤雲さくまふれぬさく川畑いふて人のふれん

赤雲

赤雲さくまふれぬさく川畑いふて人のふれん

瘦猶ハ電イヨト見ホシテワケホク肥テイタス

花柳系一集其功と云々 又 書林之言賞義辰
花柳系一集其功と云々 又 書林之言賞義辰

世を個人をとりて世俗を念にす。乃ち云の意に和舟に
大戒かりとす。及ゆりぬるゝゆてき人への以休飲いゝと
其よりわらんやとせり。云にきりりのおれをきまれば
あつゝ両機者の多とゆきゆりぬ。舟のうわゝ云云。勝
者い吾を然とてうわわゝ人唯人これ愛。眼より人

死に葉飾るをふくはふくまふのうわの權をふく

萬發齋桑魚

張雲

蕭名至廿五

集者

桑名屋甚兵衛

大坂

享保十四年

酉
十月

書舖

博勞町心斎橋

桑名屋甚兵衛
勞町心齋橋
譽田屋久兵衛

與田屋久兵衛

